



新書類

卷之二

十二

增4  
775  
224



門4曾4  
775  
224

群書類従巻第百二十八

檢校保正一集



紀行部十二

高野参詣日記

道達院内府 寶隆公

四月乃近江信光天王寺に参りて此の病を治すべしと云ふ  
十九日伏見へゆかりて般平院に参りて此の病を治すべしと云ふ  
此の病を治すべしと云ふ  
かへ道達院に参りて此の病を治すべしと云ふ  
わが病を治すべしと云ふ  
まへに参りて此の病を治すべしと云ふ  
此の病を治すべしと云ふ

とかくゆかり〜天照唐くやいふ本  
 よりつら〜本あ〜も〜  
 あむあ〜も〜  
 乃らりゆふや〜  
 々のあ〜  
 ち〜  
 ろりゆり〜  
 ろ〜  
 くら〜  
 番乃〜  
 明院よりびる人の薬か〜

う〜  
光明院 聖那  
 ぬ〜  
 乃〜  
 さ〜  
 沙舍利と以裁〜  
 大般若經一卷爰殿より  
 香心縁起住僧よ〜  
 滅と〜  
 け〜

諸堂巡禮寶藏〜靈寢と〜  
 拜見宿縁

あまのこゝろのこゝろをわきゆる聖雲院して沙教  
に母おつた事う川にまてたころこゝろをたてしゆきハ  
浄土曼陀羅に結成してかゝるころのちうに終るじゆ  
山上人お教念仏勅のありて本願の言に信業の威  
しあふこととてうにゆりぬ海井の水と掬く

まきほくく結ぶ事あるはうにやうにゆりぬ海井の水と掬く  
一初高き此ふものひくむ首弁を細くゆりて一と終る  
うにゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く  
すゝめ事入してとてうにゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く  
うにゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く  
うにゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く

如指より松原みかく漢書より道徳一書  
こ結ぶるはゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く  
和泉乃場又ゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く  
ひたくおへともあつぬ事ありて教をわきゆる海井の水と掬く  
とてうにゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く  
はるやうにゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く

木わしはゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く  
而広光の院にゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く  
ゆき若原にゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く  
あてまてうにゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く  
より安庵とてゆりぬ海井の水と掬く一やうにゆりぬ海井の水と掬く

廿二日午野々岳酒乃々おひきて宗坊よりこのと  
ちうゆゑをばとゆうたりゆゑのうらうらとて樂  
うらまへをうらうらとて入らばたまりとて

りり邦をばたまりとて入らばたまりとて家をもり  
大島社信田社ありていふことなりとていふことなり  
うらやうらありとて入らばたまりとて入らば  
よとのびりとて馬二匹ひき入らばたまりとて  
たりとて食籠場なりとていふことなりとていふことなり  
あそびのやうなりとていふことなりとていふことなり  
學頭積子のやうなりとていふことなりとていふことなり  
ひき渡りなりとていふことなりとていふことなり

こいあつていふことなりとていふことなりとていふことなり  
根元よりいふことなりとていふことなりとていふことなり  
ていふことなりとていふことなりとていふことなり  
ゆきとていふことなりとていふことなりとていふことなり  
うらまへとていふことなりとていふことなりとていふことなり  
とていふことなりとていふことなりとていふことなり  
法院とていふことなりとていふことなりとていふことなり  
うらまへとていふことなりとていふことなりとていふことなり  
誰のいふことなりとていふことなりとていふことなり

うらまへとていふことなりとていふことなりとていふことなり

荒瀬上人の筆すまゝのうらひゆめも現も春あはれとて先  
あはれせめもうらひの海にまゝの人は續後拾遺集ゆ入  
あはれやあはれいづくはれと

大永三

いづれいづれもうらひとて古木のたわひもあやも 雲を中  
實は院のいづれあはれとてあはれれらわらわらわらとて  
初めりいづれとて

あはれ又いづれとていづれとていづれとていづれとて  
に日雨氣あはれとていづれとていづれとていづれとて  
の縁もあはれとていづれとていづれとていづれとて  
花友魏とていづれとていづれとていづれとて  
西は子手記とていづれとていづれとていづれとて

あはれとていづれとていづれとていづれとて  
うらひとていづれとていづれとていづれとて  
あはれとていづれとていづれとていづれとて

あはれとていづれとていづれとていづれとて  
あはれとていづれとていづれとていづれとて  
あはれとていづれとていづれとていづれとて  
紀伊川とていづれとて

あはれとていづれとていづれとていづれとて  
あはれとていづれとていづれとていづれとて  
あはれとていづれとていづれとていづれとて  
あはれとていづれとていづれとていづれとて

いふはまゝに聞かぬは、  
かゝるに、  
響を留まらぬ、  
静むる

此は、  
此は、  
此は、  
周柱法師の

あは、  
あは、  
あは、  
あは、

あは、  
あは、  
あは、  
あは、

あは、  
あは、  
あは、  
あは、

あは、  
あは、  
あは、  
あは、

とらう姑の坊やあつらふ舞中を寄るもまじり  
奥院へまう川の池をくくきと流しをたのびぬ  
ほとろくふあらしとこわらぬかていぬのむ

るの坊や天津をあふぬのこけは乃ふあるふあ  
御廟乃前と名信卷の堂乃堂なり燈明をたすふかくむるむらや  
きてえをいつら次位借りてあひて大師所をたすは  
水精は沙念珠かと頂戴きせしれゆりて

あふぬのこけは乃ふあつらふ舞中を寄るも  
内々祭きゆりて御廟乃前と名信卷の堂乃堂なり  
重ね紙くまぬ

つるらうへはらふりあひまぬぬもくゆりたすは乃ふあ

このはまの別々御所をくくせゆるさつあつら  
ゆき卒都候あまこもくゆりて人つく替と  
おとしぬ重ね紙

むくあふぬのこけは乃ふあつらふ舞中を寄るも  
みつらうのこけは乃ふあつらふ舞中を寄るも  
言はゆわくしとくはらふもくゆりて福力く  
奉りて乃らり女あまゆりぬらぬあむいさあ

いつら御所をたすは乃ふあつらふ舞中を寄るも

還向の道なきもく日なりあつらふ舞中を寄るも

雲きわらぬすんくしとくはらふもくゆりて

古言有明は月のあまの秋の事

言即山は秋乃月あまの秋の事  
宿坊といひてくはつ事ゆ

おりの事一は秋の事  
かくて根葉は十輪守り  
海向といひてと社開

く向いとも思ひは秋の事  
女六日の事一は秋の事  
くは秋の事一は秋の事  
速哥も一は秋の事  
ぬくも一は秋の事

ゆくも一は秋の事

あまの秋はあまの秋

かくては秋の事  
赤柏といひては秋の事  
くは秋の事  
く社の前

秋の事一は秋の事  
くまふも秋の事

女七日の事一は秋の事  
女八日の事一は秋の事

女八日の事一は秋の事

沙作新辨文夫... 浪んたりそふんを記るは風  
小入て夕つもくく人新わく塔の浪んあつりあ光  
明流り不池り... かく不碩弟よりゆうてふく  
帰京流たの... せう... せう... せう...  
き... せう...

廿九日... 野岳... 舟... 舟... 舟...  
あ... 舟... 舟... 舟... 舟...  
... 舟... 舟... 舟... 舟...  
... 舟... 舟... 舟... 舟...

旅宿部云

い... 舟... 舟... 舟... 舟...  
... 舟... 舟... 舟... 舟...

江上眺望

漕か... 舟... 舟... 舟... 舟...  
... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟中本意

但... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...  
... 舟... 舟... 舟... 舟...  
... 舟... 舟... 舟... 舟...

浪... 舟... 舟... 舟... 舟...  
... 舟... 舟... 舟... 舟...

み... 舟... 舟... 舟... 舟...  
... 舟... 舟... 舟... 舟...

す... 舟... 舟... 舟... 舟...  
... 舟... 舟... 舟... 舟...

二... 舟... 舟... 舟... 舟...  
... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

神と云ふのこゝも七ふははなやとく入るよの浪のうらぶ  
天王寺にゆゑあゝいづの心へははあゝゝかゝ入る  
ゆゑとゆゑゝゝ毎升乃あめく

後おのりもゝゝひあゝゝ毎升の水は海をむ  
西つ乃名佛堂のく武庫山は現乃海陀とる太子の所筆  
以下は倭にありと云ふゝゝ乃まは皆導大師等此  
時沙教とて然とるゝゝ眼精誠生乃ゝゝひんあゝゝ  
此堂より深ゆゑは作産もあまゝ然とるゝゝ三坊の  
地衣ゝゝゝゝをわゝゝゝゝ地衣あゝゝゝゝ  
は年昔と川ふ海とゝゝゝ

うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なはく博のあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
光眼院ひゝ然とるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゆゑよ渡邊とるゝゝ然海乃那馬あゝゝゝゝゝ  
くゝゝゝゝゝゝ乃まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
岸をいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
松乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

揚子江を流るる水は、昔より、あつたは、  
言わねば、芥川が、古く、  
ふ、  
御歎堂に、  
と、  
りつゝ、

天保四癸巳年秋九月二日於八代郡上松東麻山中寫之 中村直道

吉野新記

林名院右府公條公

い、  
あ、  
と、  
井、  
や、  
あ、  
い、  
り、  
あ、



西より言ふはさういふ羽買乃山の卜り容れらるゝ  
 くかさく一物さく人任りさゆくは具とつくさ  
 しくかきりさゆく地蔵菩薩の跡自おきと法  
 大師建ま乃寺十物院よいつ終りるさまりつあり  
 せき新佛菩薩歴くさす殊勝の靈地ありやう  
 興福寺法堂縁縁一東大寺大仙殿はさうめつ橋  
 ありまの念佛堂は金利項裁一二月堂にまいつ  
 ありさるるさゆくありて堂ありさるるさるる  
 ありさるるさるるにさるるあり  
 古の古者さあさるる日よあさるる法堂は法堂は  
 肉事よりまう一えさるるさるるさるるさるる

河津けき

梅さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる 紐巴

かくて一二のつりありの中より百種とりり  
 さるるさるるさるるさるるさるる  
 さるるさるるさるるさるるさるる

紐巴

初秋川をさるるさるるのうさるる秋よかさるる  
 さるるさるるさるるさるる  
 さるるさるるさるるさるるさるる  
 眉間寺よまうさるるさるるさるる

征巴

ねさゝぬ家乃みひもま月のむら松の糸よねきと  
とありし〜

いふはるあどなり〜花さうらゐの夢はあはれ  
をぬらぬあそび〜

あさけのうを山負はむらゝ新秋とくるま風う吹  
不遷寺のいり〜業は自業は秋ありおわらあよ  
切らけのう〜Pと〜と宗と〜うはあまら〜  
法人あまら〜いひより拜と〜〜容顔のあ乗  
獨坐のふら〜うらんひひ〜

まや〜わあふら〜いりり〜いれやらふし〜あ債

あまよゝは筆も海竜も起晴寺初大ら〜まふあ  
うは僧正過船乃ゆ〜よりうひ〜こまあふ柳ゆら  
みたり新さ日〜書や〜と夏原の依ん〜ゆ〜り  
菅素相降誕乃詠とありい〜は梅はあふ〜あつと  
う〜めひびり〜〜あり跡あ書根松寺華師とあ寺  
元興寺あ〜結縁〜〜〜宿初よかりはりやつと  
〜のさうあ〜と〜あひより〜ふ大業流よりうら  
〜夢つあ〜と〜清き〜あ〜あ〜あ〜あ  
秋よゆ〜れ〜あひ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
い〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

伊勢山寺... 書つてあり

紙巴

古昔に土厚寺柿本寺... 道すこし... 井の... 社と

候... 六十七

二つ...

紙巴

分... 内山... 護柳... 二六時中... 廿七日





白紙と書くよりあり

さへんくは程も凡そあつた流亭をもよおぬゆわく山  
あゝあつたわく社流もまのりあまの庄嚴魏くわくも  
感涙とくくく

親身世紙はそくあつてまよおぬあけふ空のあまのめく

松林散々晚霞間 鳥語鶯聲寺更閑

武足元来止戈交 蕨峯可辨此法山

坊よりかぢりあつたあつたわくわくして福つさくく

社よりあつた<sup>遊向</sup>社來の景の観音に帯きり三十三所乃中

よりく海とふ人乃内きくくもくみとあり楠寺

にて太子は書密わくも奉新りあまの流りあまの

ませわくくくくく楠のまあまうは実と地乃くくく

かくりく山と佛頂山の号くく石碑をうは文佛頂

山の二字あまやうなりまことなるこの山よハ流りわり

より中きりあまも書新乃橋さうりありまは下

あまあまのくくあまのくく

法乃をそくあまのくくくくくくくくくく

あまのあまのまのまのまのまのまのまのまのまの

あまのあまの川とけりあまの文珠をくくくく

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

うら川と流りあまの板橋のうらまのくく

うらわくくくくくくくくくくくくくくくく

神ありては野にいでぬ森ありては山にいでぬ  
みちのあきなりはつちのあきなりはつちのあきなり  
とてしるすことありてはつちのあきなりはつちのあきなり

ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ

ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ

ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ

ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ  
ありては山にいでぬ森ありては山にいでぬ

山よりありぬふり坂も動地ゆく  
こつありのいふ物もあつてはつて  
はさぬむうふやそりけつふり  
あまたひのいもむとつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

大文六十二

三日よりき遠道院居日あり  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

らゆひのいふも  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

横嶺縦筆不耐堂 友人携手又文藤

再来尤喜挑花節 前度劉郎一箇僧

あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて











何れをよむればそとをさへもみよむるにふりてそをみよむるなり  
舍利講式之儀もさへもみよむるにふりてそをみよむるなり  
とらふに舍利がたふしきありあはるの脇坊さへ  
年がとくありしき入内陣へあはるしきありしき  
歩りてをさへもみよむるにふりてそをみよむるなり  
梳篦淨身のほと外類の紙も用てけしき  
法とありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
諸のよむるにふりてそをみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり

あやめの人なりてはあはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
くひもくあはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり

落花随風

花もくはつとぬをてんくしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり

名所春晴

あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり  
あはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり

十日侯貴少女ゆいりてあはるしきありしきを御経もみよむるにふりてそをみよむるなり

又の如く人々を導きて龍回山あり松乃をありて  
きりきり茶鷹とほくちやうち茶は茶系松あり  
ひもあつりてねらあり新日ひりて茶系あり  
奥のりもねら酒者さゆりてきりて茶系あり  
あつりてやめく茶系ありきりてねらねら  
うりてきりて福生院ありきりてねら  
つりてきりてありてありて本堂ありて  
うきりてきりてありてありてねら  
ありてきりて河内八尾あり金剛蓮華寺あり  
うりてありてありてありてありてありて

屋うちねら尾とのり所をありてありてありて  
尾十二ねらありてありてありてありてありて  
うりてありてありてありてありてありてありて

ありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありて

ありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありて

かゝるものもなほなほしとてなり日く晴くあつた人々  
社殿ついでに社殿のうへに海の舟がうらひうらひと  
あはれりなりの舟もよみよみよみよみよみよみよみよ  
貝のうらみよとてあはれりなりの舟もよみよみよみよ  
あつた人々もよみよみよみよみよみよみよみよ

社殿のうらみよとてあはれりなりの舟もよみよみよみよ

紅世

ちりくちりくちりくちりくちりくちりくちりくちりくちりく  
浦の舟もよみよみよみよみよみよみよみよみよ  
よみよみよみよみよみよみよみよみよみよみよ  
は別高あふたをよみよみよみよみよみよみよみよ

あつた人々もよみよみよみよみよみよみよみよ  
のとがよみよみよみよみよみよみよみよみよ  
かつて別高あふたをよみよみよみよみよみよみよ  
よみよみよみよみよみよみよみよみよみよ  
よみよみよみよみよみよみよみよみよみよ

あつた人々もよみよみよみよみよみよみよみよ  
院那波きよの鐘もよみよみよみよみよみよみよ  
よみよみよみよみよみよみよみよみよみよ  
慚愧のあつた人々もよみよみよみよみよみよ

あつた人々もよみよみよみよみよみよみよみよ  
よみよみよみよみよみよみよみよみよみよ  
よみよみよみよみよみよみよみよみよみよ  
よみよみよみよみよみよみよみよみよみよ

けるはこれなる金刹毎日己乃別まひきつるをいふは  
あまの使あり人下り雲りて物のはまかきなる項  
裁随法かきりかき寺僧とのこりてあひし座りて  
七金刹七佛乃思深し佛共双眼あり普廣院乃冲時  
初人のあまきかきうなる衆けはありていふは  
かきりてはかきりてかきりてかきりて今尊進法もは  
らけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
ちんてけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
せまのあまきけけけけけけけけけけけけけけけけ  
いふ人たきけけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
まきりてのあまきけけけけけけけけけけけけけけけ

うまのあまきけけけけけけけけけけけけけけけけ  
まきりてのあまきけけけけけけけけけけけけけけけ

迎 客 燕 談 春 水 瀨 三 位

あま乃日や夕のあまきけけけけけけけけけ

十日早朝の清秋堂の由いまり田山の橋にまきり  
うんたの秋のあまきけけけけけけけけけけけけけ  
まきりてのあまきけけけけけけけけけけけけけけ  
あまのあまきけけけけけけけけけけけけけけけ  
十言のあまきけけけけけけけけけけけけけけけ  
あまのあまきけけけけけけけけけけけけけけけ

此所とあるは... 此所とあるは...

紅巴

藤原もあらむ... 藤原もあらむ... 藤原もあらむ...

大門口... 大門口... 大門口... 大門口... 大門口...

てみ... てみ... てみ... てみ... てみ...

天文廿二年二月十日

天保四癸丑年九月四日於八代郡

上松本麻山中書寫之

中村直衛

九門道乃記

玄有法印

去歲一、天正十六之月、法初博隆殿下九門大  
友崎津より、乃、津楢を、  
き、  
者、  
  
の、  
一、  
大、  
松、  
と、

松井子禅門と云くは、一壺をひくかして、  
 其の共におもひのまじりて、晴く風も追  
 手なるをいへて、おまをて、と、おまをて、

おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、  
 軍書に、秋必別莫令、上、同、軍、古、山、と、あ、れ、し、思、ひ、を、  
 おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、  
 おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、  
 おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、

おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、  
 おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、

おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、  
 おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、  
 おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、  
 おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、

おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、  
 おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、  
 おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、  
 おまをて、おまをて、おまをて、おまをて、





あまやうらうらとあつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
そとより角の中福山へこころみくふくやうとゆふ  
城上よりふくふくといふ

城の石をさうりてあつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
石と石とあつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
深山より中みふくといふ

温泉津まきあつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
東連歌の一巻をさうりてあつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
紙つゝ糸のあつた

浪津あつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
あつたふかき海にわたるの海にありしは海舟

あつたふかき海にわたるの海にありしは海舟

うらうらとあつたふかき海にわたるの海にありしは海舟

七日濱田とあつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
るやまあつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
月とあつたふかき海にわたるの海にありしは海舟

うらうらとあつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
あつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
あつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
あつたふかき海にわたるの海にありしは海舟

あつたふかき海にわたるの海にありしは海舟  
あつたふかき海にわたるの海にありしは海舟

人のうらみのあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ  
くまあつらまじりていとおもひ

秋をよみて浦ついでに漕ぎをぬのちう船なりう一淡よ  
あこがれう波乃きうくさうんをたて

小治をよみてうにうかおちをたう何言なりうあはれう浪  
十日瀬戸新といつあはれおねう一た風あつらまじり

半和ともあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ  
あひうたれうあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ

うら漕う人をもたせうとてあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ  
古町うらうにうたせうとてあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ

くまあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ  
なぬうあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ

うみ若おりのあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ  
人おまらうあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ

みまあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ  
てうあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ

あつらまじりていとおもひをむとをふれぬ  
あつらまじりていとおもひをむとをふれぬ

うらうあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ  
うらうあつらまじりていとおもひをむとをふれぬ

あつらまじりていとおもひをむとをふれぬ  
あつらまじりていとおもひをむとをふれぬ

宗廟よりついでに中々多岐にわたる物産の多き所  
此の法乃物産の多き所にして其の多岐にわたる物産の多き所  
なり

かゝる好まざるもの多きは法の多岐にわたる物産の多き所  
心法を融通貫十方と仰ぐ人にして其の多岐にわたる物産の多き所  
なり

豊浦宮沢の事

ありぬ法乃物産の多き所にして其の多岐にわたる物産の多き所  
たゞひとまゝなるもの多きは法の多岐にわたる物産の多き所  
なり

き入てありぬ法乃物産の多き所にして其の多岐にわたる物産の多き所  
因乃物産の多きは法の多岐にわたる物産の多き所  
なり

豊前因門乃事

古くより法乃物産の多きは法の多岐にわたる物産の多き所  
其の多岐にわたる物産の多きは法の多岐にわたる物産の多き所  
なり

米舟の流しつらきほどは流す世にあらむと云ふことありては  
そなたの柳浦の名にきく事教のあらむことあり

豊國の山くらりある義子苗うね

同月七日市方園と云く竹宮のふねを流すや  
波風のあらきれり小舎よと由りて  
名もよきと云ひて無別新流と云く事初又  
船人のあきあむ合う世御と云ひて種と形先  
も秘めりてと記さる行らる成て流すこと  
今にまこと云日和乃と云く事難取と云く事ありて  
かむり初撰名書よ八金と云く事家伝書たることと云く  
けりう流りてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり  
と云く事ありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり  
流すことありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり

言流らる種乃山行と云く事ありてと云く事ありてと云く事あり  
不流すことありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり  
たりと云く事ありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり  
坊の流らる事ありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり  
春日麻鶴若社と云く事ありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり  
と云く事ありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり  
流すことありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり  
たことありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり  
音推の流すことありてと云く事ありてと云く事ありてと云く事あり



東松の抄やくきりきたるし一は小町にのりて  
宇一初ハ喜山と云えく右方七八町とありも  
もらふとて観音あり志に和部と云  
居る所なり 飛梅志古本を統くきりける  
新とえり生ゆてを改んて

高松の抄やくきりて飛梅のこおきつるなりと云え  
ちと孝深川と里人みふりて是より竹あり一  
しめしかりたる小河のあきれたるをきりて  
とありて

是乃改む一はくは深川や高松のふと西よりも  
思ふ川あり

言ふ所はありてある海河の川

あふり一人とくく河をける所ありて河の因り  
ありて一人とくく河をける所ありて河の因り  
ありて一人とくく河をける所ありて河の因り

名のせをかりて西沢より高松までありて  
は次々ありて山伏の位なりありてありて  
う地りありて山伏の位なりありてありて  
門山嶺なりありて山伏の位なりありてありて  
きありて山伏の位なりありてありてありて  
去る所ありてありてありてありてありて  
河なりありてありてありてありてありて

雨はあつきのうきとてんけき

まつこく雲波中は波とてあさるふきのふあつきの  
可也山あて

散まつりや花火入あつこ秋うあなほきあきん  
娘演あり人のききお眼指をこせと目利し流あつこ  
秋約ありまふ成人とてあつこあつこあつこあつこ

つとあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
廿八日娘演とてあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
すこくあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
娘演ありとてあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
六月二日娘演與侍位お平常玄結相高相淡具  
川あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
成乃あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
書つろりあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

風はあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
社周 六月梅

同八日利休居士へ雲白殿澄沖ありあつこあつこあつこ  
あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ  
あつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこあつこ

まきまきしとととととた乃あは月

松

なつめもりのりなむらきく

目録  
新編

箱崎のい猫はうら園白飯あまし一はふらわて各  
糸とまきしにあかし一うま川よをせえ祝えりく  
うとあふえりあらしきり

はらきとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

園白殿箱崎の松あめくすくゆりきとて一とて各

百具せしうはらきし一ゆは無り事な松がなはるり

法ともあそく西高座あつし一ふ

まきまきしはらきとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

言りまきしはらきとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

川うまきつる角とていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

まきまきしはらきとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

六月十日あまきまきしはらきとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

うねとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

ゆふさめを新紙とていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

法ようらめとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

あまきまきしはらきとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

封馬はうはらきとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

白布あめりともあふえりあらしきり

あまきまきしはらきとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

あまきまきしはらきとていこいおまあよ箱崎おまのちをせも君は城の友

卒園和歌韻

鐘

始織達君情所鐘 向未相约對同窓  
帝都門外莫言遠 千里同風一樹松  
春風吹乃春川之流 不絕以流 春風吹乃雨  
教句

とて川一まふ春くりに流るや春乃雨

宵在五日一州法行かへしとて海に大松元あらし

浪の音も秋の音も一雨の海

あまのふかひを流るわさあまの川にまあひの流るわ

こ子宗易よりしんしとて方斗ふ必事一々

あまのふかひを流るわさあまの川にまあひの流るわ

大方向白飯花親あまのやらのあまの川にまあひの流るわ  
らとてさる也所浦あまの川にまあひの流るわ 教句  
つらま川を流るわさあまの川にまあひの流るわ

夏草たもあらしの川にまあひの流るわ

あまのふかひを流るわさあまの川にまあひの流るわ 松

あまのふかひを流るわさあまの川にまあひの流るわ 由己

七月は日実自夏を流るわさあまの川にまあひの流るわ  
く糸陣とてあまの川にまあひの流るわ 秋の  
海とてあまの川にまあひの流るわ 秋の  
日とてあまの川にまあひの流るわ 遠る  
ゆりてあまの川にまあひの流るわ

阿波とくわくゆやき紀乃後まうり文

古白めをひきしむ船流出つて風あきし月防山は見え  
物乃を先立西の荷とあふるるまじり一市船本と  
云ふ所まじりて古白山はくいつたりぬ今秋を七  
月のあやふりし思ひおく境なき夜見ふ

古白の別り種まうり人みよああまの守藤流るるを  
い白折るる社見えくまて因ふらあはれ種まうりま  
原とく用とさきしに南本園寺住持一合具のよ  
世しとあまあまの山とあはれゆきいあうりま  
そ白は国なる一と九日小

り心月をいすし一とわはれ本乃う南

十日山の日びつくと山府天神へ君とゆりふの浦りつと  
田まみまあゆりまりのあをゆくと石とて原とゆり  
昔社乃借借お東紡教のあをまて一両なりとも  
つとね原しとく身行りり入あひの河らあを初  
て来すさやとふ百約まんしけら共とね船とあ  
也流をありて津若津とくひとくね流とあ  
こりまじりぬ

あまうりまの月と風力をまむあな

田あまの津あまのゆりあはれうり流とあま一網のお  
かくうけあてあまを

志新地あまのわしとあまをぬまうりあはれ海の風とあまうり



と無きことし何きもゆきありては清りと見  
る處いささ後く子息の備立命の座ありて  
礼拝所のと敷地紙をすして後御すなりあり  
き御所の奥坊より斗よりひは御宗乃き向  
かすかまへとてまけりゆふ又附方のとて御宗乃  
けふとまゆはしつともあうにあらうとわすかり  
うしと事ありと云一そ汝とて何うとてか  
あそ乃びとてあまの御宗乃き御宗乃き  
十有官侍津ありとて是年とてまゆありとて見  
ゆすてあまの御宗乃き御宗乃き御宗乃き  
ゆあくうきよりゆ後乃津と儀御座ありと

あまの御宗乃き御宗乃き御宗乃き御宗乃き  
かりたえは御宗乃き御宗乃き御宗乃き御宗乃き  
あまの御宗乃き御宗乃き御宗乃き御宗乃き  
ゆあくうきよりゆ後乃津と儀御座ありと

兼抄あり月やとてはかたれとあり

ゆきより御宗乃き御宗乃き御宗乃き御宗乃き  
ゆあくうきよりゆ後乃津と儀御座ありと

暖やありとゆきより御宗乃き御宗乃き御宗乃き御宗乃き  
十九日備前のより御宗乃き御宗乃き御宗乃き御宗乃き  
ゆあくうきよりゆ後乃津と儀御座ありと



そらとありてなほとほしきとてまゐるにゆくものゝはたけしうて  
是より相枕のうへに物を挿してはるるの枕  
あらそをせりふのうへにたけしうてはるるの  
けりふとふくしうのうへにたけしうて

行船のうへにたけしうてはるるの枕  
きてもうのうへにたけしうてはるるの枕  
ふた月迄のうへにたけしうてはるるの枕

あつちのうへにたけしうてはるるの枕  
又作のうへにたけしうてはるるの枕  
あつちのうへにたけしうてはるるの枕

何れもたけしうてはるるの枕

伏す乃酒のうへ

すなはちのうへにたけしうてはるるの枕  
言ふふやと彼のあつちのうへにたけしうてはるるの枕  
くさしうのうへにたけしうてはるるの枕

あつちのうへにたけしうてはるるの枕  
去に月丹後とてはるるの枕  
の酒とまじりてはるるの枕  
あつちのうへにたけしうてはるるの枕  
あつちのうへにたけしうてはるるの枕

なつちのうへにたけしうてはるるの枕

天保四癸丑年九月廿日於松本麻山中寫之

中村直道

九列乃之り此記

豊后勝俊朝臣

大相國も海ありてかたむき守りてまゝに存しと多  
天正九年在米川に於て瓶裝より御出なす御書より  
事ゆゑに御書に書れし目力本の兵部少輔に任じ候  
奉すすゝのりといひ月の中は御書より一葉は  
おりのひまを奉りてとて海よりと書れぬ人のも  
よりおむる潤し事ゆゑに御書より二首とあり  
くりへりもたりける

玉降乃之地の山をさうとていふかたにふしむるも  
あつたにぬぬひさかたと書れぬありたりと書れ  
後おむるえぬぬぬと書れぬありと書れぬあり







小島めめうきく一更寝ふたりきんひあぐり  
あつらやそくうは祿のあらきも為り一らきく  
ゆらうひやしもあきたけあつり一あふそりはた  
しほあき道のおそたはあそくふくもくつはた  
なま

あそきく一途のあつりあそく一うはねの祿おと  
そらあぬふひは差のたきさうむてく一阪の言  
なまはあつり一あつりあつりあつりあつり  
ねもや眉ううせあつりあつりあつりあつり  
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
あそきく一あつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつり  
よひあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
ういしししししししししししししししししし  
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
乃田月清あつりあつりあつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
まい入あつりあつりあつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
ゆあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり









あつあつなほしきもねさうあつひる御うはえて  
てはあつまくねさうきんあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

天保四癸巳年秋九月七日於八代郡上松原麻山中  
書寫之

中村萬喜直道

